

### 第二席 平生業成

眞宗の義組

一 眞宗の教義の組立てといふものは大體どうなつて居るかといふことを詳しく話したい、大體譯が解らんといふといかん、例年は一週間か十日ばかり勤めることになつて居るが、今回は私はさういふ面倒いことを話したいから初めから終りまで勤め、おまけに一日延ばして十六日間話す、それで今回は成るべく詳しく話したいと思ふ。

墮ちる機お助

随分面倒い話も出て来るし事柄も随分こみいつて来る。之はあんた方で無い、坊主が二十年以來争つて居る。お前さん等は知らんけれども京都に於ても二十年以來墮ちる機お助け、たのむ機お助け、條件なしのお助けといふものが、表には

け、たのむ機お助け

現はれて居らないが知らず識らず争ひをつゞけて居る、此の譯を一つ詳しく話したい。

坊主の争ひがあら

定めし此總會所へ始終参る人はよく解つては居るだらう、墮ちる者をお助け、たのむ者をお助け、とあるぢやらう、全體これはどういふことだらう、或人は彌陀を一念たのめばお浄土へ連れ込んで下さる、之が解つたのが信心だと云ふ、こんな阿呆らしい話が何處にあらう。かういふ馬鹿な事を教へる坊主があるから眞宗の安心かくづれて仕舞ふ。殊に此の墮ちる機お助け、たのむ機お助けといふ二つといふものは二十年以來同行でない坊主の上に争ひがあつた、之はよく聞分けんならん、此の譯を一つよく腹に入れて貰ひたいと思ふ。

平生業成の根源

二 所があんた方もさうであらうが、墮ちる者をお助けといふお助けを直にお浄土へ持つて行くだらう、たのむ者をお助けといふお助けもお浄土へ持つて行くだらう、これがそもゝ間違ひの根源、墮ちる機お助けたのむ機お助けはお浄土へ

持つて行くので無い、若し持つて行つたらそれは眞宗の教で無いことになる。八  
 十通の御文は其の事ばかり書いてある。此の墮ちる機お助けは御浄土へは持つて  
 行かん、たのむ機お助けもお浄土へはもつて行かん、性根心地の確かなたつた今  
 お助けに預かつてしまふ、之が平生業成といふ事になつて来るのだ。平生業成の  
 六字の信心の謂はそこへ持つて来る。

三 之は昨年であつたか一昨年であつたか、わしがかういふ話をした、墮ちる機が  
 お助けにあつて墮ちん機に轉じ變つて正定聚の機になつた所が南無、それから娑  
 婆五十年は護りづめに護つて貰ふそれが阿彌陀佛、此たのむ者を攝取するといふ  
 事を叮嚀に御示し下さつたのが蓮如様の八十通の御文の御化導である。故に蓮如  
 様は南無の二字の謂れを「諸々の雜行を棄て、後生助け給へとたのむのちや」と仰  
 せられた。私の墮ちる機を彌陀に助けられる、其のお助けは死んでからでは無  
 い今お助けにあふのだ。此のお助けは彌陀が引受ける事彌陀が受持つこと彌陀が

機墮ちる  
 ちん機墮  
 のがする  
 無の南

「まか  
 せよ」  
 せよ  
 勸め  
 苦の  
 けが  
 るが  
 拔

受取る事、此の勸命が、まかせよ、よく聞く事だらう、われにまかせよ、われを  
 たのめ、我にまかせよといふ事は墮ちる機を彌陀に受取つて貰ふ事、死んでから  
 でない、今、之は一念後念の話をせんと解りかねる。墮ちる機が墮ちん機に轉じ  
 變つたのが一念の信樂、一念のお助けにあふど何時でも、之が後念相續の欲生と  
 いふ、之はわしがいはなくても總會所へ參る人は皆よく解つて居る。後念相續の  
 欲生は御浄土の方へ向ふが、一念の方は御浄土へ向ふので無い、墮ちる機を阿彌  
 陀様が引受けて墮ちん機に轉じ變へて下さる、これが南無、それがたのむ機。解  
 つたねえ。

四 眞宗では、何時でも命終つたら彌陀同體、之が平生業成、平生の時業事成辨  
 する、所が吾々の望み目的といふものはどこにあるか、命終つたら佛、死んだら  
 御浄土だらう。所が佛とか御浄土といふものは吾々どどの位段が違ふか、五十二  
 段違ふ、一段や二段ならよいが五十二段ではないか、それを吾々が望んだ、望ん

お座參  
 的の目

だはいいけれど、其の五十二段違ふ浄土といふものは、吾々が見る事も出来ぬ、拜む事も出来ぬ、想像と心に思つて見る事も出来ぬ。不可稱不可説不可思議、とよく聞くだらう、それを望む、偉いものぢやないか。そこに矛盾が出来た、どういふ矛盾かといふと、見えもせん拜めもせん想像と心に思つて見る事も出来ぬ御浄土を手を握つたやうに確かになりたといふ、それがなれんから煩悶するぢやらう、面白い話ぢやないか。かういふ五十二段も違ふ大きな境界は吾々に望める事でない、幾世々々の阿彌陀様の御養育にあづかつてかうなつた、此の心は只では起きぬ此の望み迄が阿彌陀様が起させて下つた。之が遍照の光明の御養育、お前さんやう考へて見、吾々が心で思つて見る事なら望んでもよい、心で思つて見ることも出来んことを望む、それが大體矛盾だ、安心したい落着きたいと氣張れば氣張る程苦しむぢや。此の中にも煩悶をしてござる人があるだらう、長い間聞いても／＼聴聞しても／＼、頂いても戴いても、參らせて貰ふ御本願に

佛に望みなり  
た望みなり  
が望みなり  
昭の起望  
明の起望  
養育の起望

露塵程の疑ひもないが、サアとなつて大丈夫と思つて呉れん……。此處がナンマ  
ンダ佛といふ所ぢや……。人の前では阿彌陀様の御慈悲が有難い、阿彌陀様の間違  
はさんの御慈悲が手丈夫だといひ乍ら、サアとなつたら、何やらそこが變なも  
のぢや、ア、よいなアと却々いはん、そこがなか／＼困難ぢやらう。之は私が  
いふまでもない、よう解つて呉れ。ウツカリ聴くなよ、聴聞の仕様が悪いといつ  
まで經つてもいかん。

見えもせん聞えもせん想像も及ばん所をどうしたら確かになれるか、かういふ  
と、それは阿彌陀様が助けて下さるに間違ひない、と直いふだらう、又言ひたか  
らう、どう助かる、私の方は確かにないが向ふさんが丈夫ぢやで、私の方は  
しつかり無うても向ふさんが丈夫ぢやで、滅多な事は無からう、アヤフヤなもの  
だ。その所をはつきり決めんならん。

五 どうすればよいか、之は浄土真宗の三代目覺如さんが一番詳しい、あんた方

も始終聞いてござるだらう、心と身、心身命終といつて身の迷ひの根絶れのする時と心の迷ひの根絶れのする時と二つある。心の迷ひの根絶れはたつた今、身の迷ひの根絶れは臨終と二度に分れる。之はわしがいはんでも聞いた事があるだらう、變な顔をして居るが聞いた事はないか。心身命終によつてお助けが二度ある。正定聚のお助けと滅度のお助けと二益になつて居る。そんな事位聞いて居るだらう。覺如さんの御化導は、

平生のとき、善知識のこぼのしたに、歸命の一念を發得せばそのときをもて、娑婆のをはり臨終とおもふべし。

身は迷ひの凡夫なれども、靈だけは其の時ちやんと迷ひのうちきり、之が平生業成となつて居る。平生の時、善知識の言葉の下に雑行棄て、彌陀たのむ一念に靈だけはお助けにあふ、そこで何時死んでも喜ぶ、之が後念相續、一念といふものは一期に一度、身の迷ひの根絶れは臨終、佛様になる事は今は少し早いネ

一念に  
度期には

一、マア一年か二年向ふがよからう。靈の迷ひの根絶れは今する、今お助けにあふから一念、それからさきは何時死んでも參らせて下さるに間違ひない、喜び身縁の絶れるのを待つて居る、之が後念相續、之を真宗では心身命終といふ。靈の迷ひと二つ立てる、靈が平生の時お助けにあひ、今迷ひの根絶れをする所を南無阿彌陀佛の六字のお助けといふ。六字は身の迷ひの根絶れをする時には要らぬ、靈の迷ひの根絶れをするたつた今要る。吾々の靈の迷ひの根絶れは今するが、前生の業が残つて居るから死ぬるまでは此の身は迷ひの凡夫である、此の世の縁の切れるなり、身は此の世の置土産、靈だけは、何時でもお淨土か、と喜んで行く、真宗では今お助けにあづかるのが肝要、飯食ひさへすればお腹がふくれる、所がお同行は偉い者で、飯食はずにお腹が太る事を考へて居る。嘘かと思ふならやつて見い一返にわかる。お淨土參りが手握りしたくば今お助けにあへ、お助けは身の方でない、靈のお助けに今あふ、講釋が却

今お助  
けに肝  
要るが

お浄土  
を参りな  
る煩悶  
が増す

却難しいので初めて聞くと解り難い事があるだらう。心身の命終と二つに分て、魂の迷ひの根断れは今、身の迷ひの根断れは臨終。お浄土に参らせて貰ふ方が皆の目的ではあるが、それは五十二段も隔てがあるから見る事も聞く事も想像と心に考へて見る事も出来ぬ。どうしたら確になれるかと考へても、それはあかん、お浄土へ参る事は考へてもあかん、それを思ふや思ふ程困る、煩悶するのみである。靈がたつた今六字のお助けにあひ、墮ちん事に決まつて見よ、何時でもお浄土と喜ばれる。其の事を平生業成と教へて来た。所があんた方は、墮ちるなりですつとお浄土へ行きたからう、たのんでお助けとは全然の違ひだ。此の六字のお助けは死んでからでない、今靈がお助けにあふ事、臨終待つ事なし來迎たのむ事なし臨終の夕は放つて置いてよい。靈だけはちやんとお助けになつて居るから身は此の世の置土産、靈だけは何時でも……之は三三返言はんと解るまいで、イヤになる程いふ。

身は凡  
夫は凡  
聖衆は

之が大體解つて来ねば雜行棄て、後生助けたまへと彌陀たのむといふ事が解らぬ。どういふ所に心が決まつて来るか、安心して来るか解らん。「平生の時善知識の言葉の下に、歸命の一念を發得せば、其時を以て、娑婆の終り、臨終」だから一念歸命の當體、身は迷ひの凡夫でも、心だけは浄土の聖衆の一人

超世の悲願きしより  
われらは生死の凡夫かは

有漏の穢身はかはらねど  
心は浄土にすみあそぶ

阿彌陀様の本願が聞こえてから吾々は生死の凡夫ではない、凡夫かはいふ事は凡夫ではないといふことだ、えらいもので皆んな菩薩さんばかりだ。菩薩も時には居眠りさつしやる、よいか。阿彌陀様の本願が聞こえてから、相形は昔の通り、膿血の垂るゝやうな、欲しや憎しや可愛やとやつて居る此の身ではあるが、有漏の穢身は變らねどといふのはさういふ事だ。

天狗同  
領

六 私が昨年も話をした事であるが、一昨年であつたか、一昨々年であつたか、

解振り

越中に彌波といふ所がある、其の上の方に山崎がある、そこに五六日居つた。あそこら邊りは高座の上から降りると、こゝら邊と違ふて、御示談を、と云つて動かぬ、私は物を書いて居つたものだからやう行かん、隨行にお前へ行、と云つて話しにやつた。所が三日の日になるとどうしてもきかぬ、仕方が無いから行かうかと、さて行つた所が廣い所へ皆残つて居る。あそこらは、こゝら邊もさうぢやらうが、前の方に同行の頭が並んで居る、十四五人何村の何の何某、一番偉い同行といふやうな顔をして居る。前に坐つた者は皆偉い天狗さんばかり、皆背中に旗の五本位たてゝ居る。

「私は今高座の上で話したことについてお前さんらに訊んで返事をして呉れ、先づ一番上から聞かうか、お前さん日々念佛稱へるだらうが、あの念佛はどういふ念佛ぢやな」、「それは解つて居ります」、「俺には解らん、どういふ念佛かな」、「そりやあんだ解つて居る、御恩報謝……」、「次は」、「其の通り」、「其の通り」

皆チヨボ／＼。「ヨシ、それならもとへ戻る、何で御恩報謝の念佛ぢや、どういふお禮の念佛ぢや」と云つたら「それはあんだ解つて居る」、「俺には解らん、どういふ御恩報謝の念佛ぢや」、「命終つたら淨土へ參らせてお呉れる」、「ヨシ次」、「私も」、「其の次」、「私も」、「私も」皆同じ事だ、「さうするともう一返もとへ戻つて聞か、命終つてお淨土へ參らせて貰ふと、云つてもまだ貰はんさきだ、物を貰はんさきに越中はお禮をいふか」、「きつと貰ひます」、「まだ貰つては居らんぢや無いか」、「まだ貰つては居りませんがきつと貰ひますからさきに云つて置きます」お禮のさきぶれ、こゝだけよく聞き分けて呉れ、此邊は貰はんさきにお禮をいふか。云ひ相な顔付だ、おかしいだらう。西藏邊に行くと、西藏も佛法の國であるが、盗人が佛さんに懺悔するのに、私はいふ悪い事をしましたから堪忍して下さい、これからさきも亦やりますから、さきにあやまつて置きます、といふことがある相なが、まだ貰はんさきに御禮をいふのは丁度これと同

貰はん  
先きに  
御禮を  
云ふか  
西藏の  
奇習

じ事<sup>こと</sup>だ<sup>これ</sup>之<sup>は</sup>は<sup>おほ</sup>大きな<sup>まぢか</sup>間<sup>ま</sup>違<sup>ちが</sup>ひ、真<sup>しん</sup>宗<sup>しゆ</sup>の<sup>は</sup>これと<sup>ちが</sup>違<sup>ちが</sup>ふ。

御<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>あり</sup>つる<sup>後</sup>なれば<sup>此</sup>の<sup>念</sup>佛<sup>ぶつ</sup>をば<sup>佛</sup>恩<sup>おん</sup>報<sup>ほう</sup>謝<sup>しゃ</sup>の<sup>稱</sup>名<sup>な</sup>ともい<sup>ひ</sup>又<sup>また</sup>師<sup>し</sup>徳<sup>とく</sup>報<sup>ほう</sup>謝<sup>しゃ</sup>と

もいふ。

御<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>が</sup>濟<sup>す</sup>んで<sup>から</sup>の<sup>お</sup>禮<sup>らい</sup>だ、御<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>が</sup>濟<sup>す</sup>まぬ<sup>うち</sup>、貫<sup>くわん</sup>はん<sup>と</sup>さき<sup>の</sup>お禮<sup>らい</sup>で<sup>ない</sup>、  
よしこゝら邊<sup>へん</sup>を<sup>聞</sup>き<sup>分</sup>けて<sup>貫</sup>はん<sup>とい</sup>かん。

靈<sup>たま</sup>の<sup>御</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>にあ</sup>づか<sup>つ</sup>ても<sup>身</sup>の<sup>御</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>は</sup>殘<sup>のこ</sup>つて<sup>居</sup>る、<sup>け</sup>れ<sup>ご</sup>も<sup>靈</sup>の<sup>御</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>が</sup>濟<sup>す</sup>んで<sup>しま</sup>ふと、<sup>身</sup>の<sup>縁</sup>の<sup>切</sup>れる<sup>のを</sup>待<sup>ま</sup>つて<sup>居</sup>る<sup>だけ</sup>、<sup>何</sup>時<sup>い</sup>でも……<sup>そ</sup>れ<sup>で</sup>なければ<sup>平</sup>生<sup>せい</sup>業<sup>ごう</sup>成<sup>じやう</sup>と<sup>はい</sup>へ<sup>まい</sup>。成<sup>じやう</sup>就<sup>じゆ</sup>の<sup>文</sup>の、<sup>聞</sup>其<sup>もん</sup>名<sup>な</sup>號<sup>ごう</sup>信<sup>しん</sup>心<sup>しん</sup>歡<sup>くわん</sup>喜<sup>ぎ</sup>乃<sup>な</sup>至<sup>し</sup>一<sup>い</sup>念<sup>ねん</sup>至<sup>し</sup>心<sup>しん</sup>廻<sup>くわい</sup>向<sup>かう</sup>願<sup>がん</sup>生<sup>せい</sup>彼<sup>ひ</sup>國<sup>こく</sup>即<sup>じやく</sup>得<sup>とく</sup>往<sup>わう</sup>生<sup>せい</sup>住<sup>じゆ</sup>不<sup>ふ</sup>退<sup>たい</sup>轉<sup>てん</sup>」<sup>とい</sup>ふ<sup>御</sup>化<sup>げ</sup>導<sup>だう</sup>にあ<sup>ふ</sup>まい。一<sup>いっ</sup>寸<sup>そう</sup>面<sup>めん</sup>倒<sup>たう</sup>にな<sup>つ</sup>た<sup>が</sup>、  
マテ〜。

御<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>あり</sup>つる<sup>後</sup>なれば<sup>此</sup>の<sup>念</sup>佛<sup>ねんぶつ</sup>をば<sup>佛</sup>恩<sup>ぶつおん</sup>報<sup>ほう</sup>謝<sup>しゃ</sup>、——<sup>お</sup>前<sup>まへ</sup>さん<sup>は</sup>死<sup>し</sup>ん<sup>だ</sup>ら<sup>ら</sup>お<sup>助</sup>け<sup>が</sup>終<sup>しま</sup>つ<sup>たら</sup>御<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>と</sup>考<sup>か</sup>へ<sup>て</sup>居<sup>お</sup>る<sup>だ</sup>ら<sup>う</sup>が、<sup>そ</sup>れ<sup>で</sup>は<sup>腹</sup>が<sup>満</sup>れ<sup>ん</sup>。今<sup>いま</sup>お<sup>助</sup>け

魂<sup>たま</sup>が<sup>六</sup>字<sup>じ</sup>の主<sup>しゆ</sup>なる

が<sup>濟</sup>んで<sup>しま</sup>ふ<sup>もの</sup>の<sup>だ</sup>から、<sup>今</sup>度<sup>こんど</sup>は<sup>何</sup>時<sup>い</sup>でも、<sup>と</sup>身<sup>み</sup>の<sup>臨</sup>終<sup>りんじやう</sup>を<sup>待</sup>つて<sup>居</sup>る<sup>だけ</sup>の<sup>事</sup>。

靈<sup>たま</sup>の<sup>迷</sup>ひ<sup>の</sup>根<sup>ね</sup>断<sup>たぎ</sup>れ<sup>は</sup>今<sup>いま</sup>、<sup>南</sup>無<sup>なむ</sup>阿<sup>あ</sup>彌<sup>あ</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>は<sup>身</sup>の<sup>方</sup>には<sup>使</sup>は<sup>ぬ</sup>、<sup>靈</sup>が<sup>今</sup>お<sup>助</sup>け<sup>にあ</sup>ふ<sup>謂</sup>れ<sup>が</sup>南<sup>なむ</sup>無<sup>あ</sup>彌<sup>あ</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>。魂<sup>たま</sup>ぢ<sup>や</sup>ぞ、<sup>身</sup>ぢ<sup>や</sup>無<sup>な</sup>い<sup>ぞ</sup>。靈<sup>たま</sup>が<sup>六</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>お</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>にあ</sup>つて<sup>六</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>主</sup>になる、<sup>偉</sup>い<sup>事</sup>になる<sup>のだ</sup>ぞ、<sup>六</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>主</sup>になる<sup>から</sup>、<sup>も</sup>う<sup>身</sup>の<sup>縁</sup>の<sup>切</sup>れる<sup>のを</sup>待<sup>ま</sup>つて<sup>居</sup>る<sup>だけ</sup>、<sup>何</sup>時<sup>い</sup>も<sup>命</sup>終<sup>め</sup>つても<sup>彌</sup>陀<sup>だ</sup>同<sup>どう</sup>體<sup>たい</sup>、<sup>向</sup>ふ<sup>眺</sup>めて<sup>大</sup>丈<sup>だい</sup>夫<sup>ぶ</sup>とい<sup>ふ</sup>ので<sup>無</sup>い、<sup>今</sup>六<sup>い</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>お</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>にあ</sup>つた<sup>所</sup>を<sup>い</sup>ふ<sup>から</sup>何<sup>い</sup>時<sup>い</sup>でも、<sup>と</sup>い<sup>へ</sup>る。身<sup>み</sup>の<sup>命</sup>が<sup>終</sup>つて<sup>御</sup>淨<sup>おんじやう</sup>土<sup>ど</sup>參<sup>ま</sup>り<sup>が</sup>手<sup>て</sup>握<sup>にぎ</sup>り<sup>した</sup>くば<sup>今</sup>御<sup>いま</sup>助<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>にあ</sup>づか<sup>れ</sup>、<sup>今</sup>御<sup>いま</sup>助<sup>おん</sup>助<sup>たす</sup>け<sup>にあ</sup>づか<sup>つ</sup>た<sup>とい</sup>ふ<sup>思</sup>ひ<sup>の</sup>無<sup>な</sup>い<sup>もの</sup>は、<sup>命</sup>終<sup>め</sup>つて<sup>御</sup>淨<sup>おんじやう</sup>土<sup>ど</sup>へ<sup>參</sup>ら<sup>せ</sup>て<sup>貫</sup>ふ<sup>とい</sup>ふ<sup>喜</sup>び<sup>も</sup>起<sup>おこ</sup>らぬ。今<sup>いま</sup>お<sup>助</sup>け<sup>にあ</sup>づか<sup>つ</sup>た<sup>とい</sup>ふ<sup>思</sup>ひ<sup>さ</sup>へ<sup>あ</sup>れば、<sup>無</sup>常<sup>むじやう</sup>の<sup>風</sup>は<sup>何</sup>時<sup>い</sup>でも<sup>來</sup>いと<sup>喜</sup>べる。それが<sup>真</sup>宗<sup>しんしゆ</sup>の<sup>平</sup>生<sup>せい</sup>業<sup>ごう</sup>成<sup>じやう</sup>の<sup>謂</sup>れ<sup>である</sup>。

七<sup>な</sup>南<sup>なむ</sup>無<sup>あ</sup>彌<sup>あ</sup>陀<sup>だ</sup>佛<sup>ぶつ</sup>の<sup>六</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>謂</sup>れ<sup>とい</sup>ふ<sup>もの</sup>は<sup>死</sup>んで<sup>御</sup>淨<sup>おんじやう</sup>土<sup>ど</sup>に<sup>參</sup>る<sup>道</sup>具<sup>どうぐ</sup>に<sup>使</sup>は<sup>ぬ</sup>。昔<sup>むかし</sup>は<sup>死</sup>んで<sup>から</sup>お<sup>助</sup>け<sup>にあ</sup>づか<sup>つ</sup>て<sup>御</sup>淨<sup>おんじやう</sup>土<sup>ど</sup>へ、<sup>と</sup>い<sup>ふ</sup>や<sup>う</sup>な<sup>馬</sup>鹿<sup>ばか</sup>な<sup>事</sup>ば<sup>か</sup>り<sup>い</sup>

は<sup>お</sup>六<sup>ろく</sup>字<sup>じ</sup>の<sup>土</sup>主<sup>どしゆ</sup>の<sup>道</sup>具<sup>どうぐ</sup>で<sup>は</sup>な<sup>い</sup>

ふ。あゝいふ阿呆な事をいつて、蓮如様の御化導のあそこをつかまへ、こゝをつかまへるといふやうな事は大きな間違ひ。萬善萬行恒沙の功德を興へるといふ事はどこだといふ場所がちやんと決まつて居る。さういふ事を滅茶々にやるのは大間違ひ。南無阿彌陀佛の六字の謂れはどこにあるか、命終つてお淨土に參る道具には使はぬ、性根心地の確なつた今、私が御助けにあづかる謂れが南無阿彌陀佛。

攝光明の  
攝取の  
撮らるる  
撮らるる

墮ちる機をお助けは御淨土と違ふ、今、墮ちる機を受取る事引受ける事、受持つ事、阿彌陀様が墮ちる機を受持つてお呉れ、引受けてお呉れて、其の受取つて貰つた機の事を南無の機、それが正定聚の機、其の南無になつた機を娑婆五十年護りづめに護る事を後念相續のたのむ機といふ。御文さんにはこればかり書いてある、家へ歸つて讀んで見い、さうすれば腹に這入る。南無阿彌陀佛の六字によつて墮ちる機がお助けになつて墮ちん機に、轉じ變る、さうして攝取の光明に攝め取

られたらどうする、それでも墮ちるか。そこで向ふは見えんでも大丈夫といかんならん。それが平生業成、六字の謂れをよく心得たるが他方の大信心——墮ちる機が墮ちん機に轉じ變つた模様を阿彌陀様の方で「われにまかせよ、われをたのめ」と呼んで下さる、雜行すて、後生助け給へはそこにある。

墮ちる機を受取り引受けてしまつて墮しはせんといふ念力を届け、墮ちる機が墮ちん機に轉じ變つた機の事を南無の二字の謂れといふ。それから南無になつて墮ちん機になつたから、よう其の機になつた、と阿彌陀様が其の場を去らずに攝取の光明で守りづめに護つて下さる、之が阿彌陀佛、此の二字四字のお助けは死んで向ふの事で無い、今の事、墮さんといふ念力を貰つておまけに護られるなら、それでも墮ちられるか。

いかに地獄へおちんとおもふとも、彌陀如來の攝取の光明に、おさめとられまいらせたらん身は、わがはからひにて、地獄へもおちずして、極樂にまい

るべき身なるがゆるるなり。

どこでかたづいた、ちやんと墮ちる機は彌陀が受取り、墮しはせんの念力を貰つた、おまけに今日攝取の光明にお守りづめなら墮ちたうても墮ちられませんが喜ぶ。

信願  
際  
の  
交

八　そこで自力といふ事をよう心得んならん、自力と他力は信と願との違ひ、信といふのは阿彌陀さん向き、御淨土向きを願といふ、眞宗では後念相續は御淨土向きだが一念は阿彌陀さん向き、此の扱ひを信願の扱ひといつて皆よくやり損ふ。それで今阿彌陀様が助けてお呉れる御淨土へ参らせてお呉れるといふ事を疑ひもせず、大丈夫なお慈悲と信じて安心して居るけれども、サアとなると何んにもつかまへ所が無いが、どうなるぢやらう、と思ふだらう。あれはお淨土へ持つて行くからさうなる。これはお淨土へ持つて行くで無い、何ぼう聞いても何ぼう聴聞しても、何ぼう理窟は解つても、サアとなつたらどうしても此の心が承知せん、心がウンといひません、それは五十二段も違ふで、そなたの心に思ふ事はやめて置け、やめてどうしよう彌陀が受持つてやらう、参れんと解つたらそこ受持たう、行けんと解つたら、そこ引受ける　墮ちると解つたら、そこ受け持たう、罪業を彌陀にまかせよ、往生を彌陀にまかせよ。いよ／＼となつたらどうして見ても承知せん、承知せんのが當り前、往けるとなつたら自分で行け、往けんとわかつたら受持つ親が待つて居る、雜行すて、彌陀たのむ一念はこゝをいふのだ、私の方で處置のつかん所を彌陀に渡してしまひ、墮ちるも参るも彌陀に渡した所が一念になる所、引受け手の親切に安心する、それが南無の機、其の機を阿彌陀如来は深く喜びまし／＼て、ようこそ其の機になつたと護りづめに護つてお呉れる。これがたのむ機お助けといふこと、大分解つたやうな顔付をして居る、忘れてはいかんぞ。

墮ちる機お助けは南無の事、此の助けはお淨土でない今阿彌陀様に受持つて貰

往ける  
自分  
に分  
け

ふ事、引受けて貰ふ事、受取つて貰ふ事、お助けにあつた機の事を南無の機、南無の機を阿彌陀様が娑婆五十年護りづめに護る事をたのみ機お助けの阿彌陀佛、此の六字の謂れによく納得出來て見よ、見えん淨土も見たよりもといふ丈夫な喜びが出て來る。